



小樽の歴史文化の発掘と地域活性化（前編）

～「マッサン」関連の取り組みから考える～

小樽商科大学ビジネス創造センター学術研究員

高野 宏 康



1. 小樽の歴史文化を活かした地域活性化の課題

小樽には、他の街では失われてしまった歴史文化がいまも息づいている。運河や石造倉庫などの歴史的建造物をはじめ、明治期から営業を続ける飲食店や銭湯など、歴史文化が街全体の魅力となっている。昭和40～50年代の運河保存運動の過程で小樽の歴史文化が再発見され、観光まちづくりに活用していく流れができ、「歴史とロマン」の街のイメージが定着した。しかし、観光動線の固定化、様々な歴史文化を説明する物語（ストーリー）がわかりにくいことなどが課題となっている。

今回は、朝の連続テレビ小説「マッサン」に関する取り組みから、これらの問題について考えてみたい。

2. 竹鶴政孝・リタと小樽に関する歴史的事実の発掘

「マッサン」の登場人物のモデルとなった竹鶴政孝とリタ夫妻は、ニッカウキスキー創業者として著名であるが、小樽とのゆかりはこれまでほとんど知られていなかった。調査を開始すると、小樽とのゆかりに関する歴史的事実が数多くわかってきた。

ニッカでつくられたウイスキーは小樽から各地へ出荷され、歓楽街ではウイスキーが消費された。工場建設地に余市が選ばれた理由の一つは小樽に隣接していることにあったのである。政孝は取引先の三井銀行など仕事で小樽によく訪れ、ニッカ会の宴会は海陽亭などで行われた。仕事帰りには市場で新鮮な食材を買い求めた。

リタも小樽を頻りに訪れている。当時、小樽はモダンな都市文化を享受できる大都市であり、買い物や映画、米華堂やあまとう、館などの洋菓子喫茶店を楽しんだ。水天宮の手前にある小樽聖公会は、リタと同じ宗派の教会であり、礼拝に訪れていた。宣教師のイギリス人女性と親しく、礼拝後、英語で長時間会話を楽しんでいた。礼拝堂改築寄附金の記録にはリタと思われる人物名がみられる。リタは小樽高商～小樽商大のフランス語講師、太黒マチルドと親しく、養女のリマや友人たちと、いまでいう「女子会」的な集まりを行っていた。ドラマでは、全く登場しなかったが、実際は小樽の友人たちのネットワークがリタを支えていたのである。

3. 歴史的事実を活用した地域活性化の取り組み

小樽商大では、調査で発掘した小樽とのゆかりに基づいた地域活性化の取り組みを行った。竹鶴夫妻と小樽のゆかりをまとめたパネル展示、講演会、ガイドツアー、リタのレシピ商品化、ご当地ハイボール企画への協力、各種メディアへの情報提供等である。

特に注目を集めたのは、リタのプディングケーキの商品化である。余市のウイスキー博物館に展示されていた手書きレシピを参考に、市内の洋菓子店と協力して商品化したところ反響が大きく、限定販売の予定であったが現在も販売継続中である。ゆかりの洋菓子喫茶店・米華堂のアップルパイも連日完売が続き、「物語」と「食」の魅力が、人々の関心を強く喚起することがわかった。

「おたる・よいちご当地ハイボール」では、商工会議所、観光協会、民間団体、商大などで実行委員会を組織し、コンテストを実施。最優秀レシピを小樽・余市の約100店舗で提供、エピソードと提供店を掲載したガイドマップを作成した。特筆すべきは、小樽と余市の両地域の飲食店を紹介するガイドは今回が初ということである。隣接しているが、「近くて遠い」小樽と余市を物語の力で結びつけたといえよう。

4. 地域観光資源としての竹鶴夫妻

ドラマ終了後、約半年が経過した現在もニッカウキスキー余市蒸溜所は観光客でにぎわっているが、蒸溜所だけでなく、ドラマをきっかけに地域全体の魅力再発見へとつなげていくことが課題である。その際、竹鶴夫妻が、スコットランドで出会い、理想の地を求めて「故郷を離れ、新たな地で、新たな故郷を創っていった」、北海道の歴史文化を象徴する人物として、地域史のなかに位置づけていくことが一過性のブームに終わらせないために重要である。

竹鶴夫妻と小樽とのゆかりは、定型化しがちな小樽イメージに広がりをもたらず事例となったが、今回は小樽の歴史文化をさらに掘り下げてみたい。

小樽商大の取り組みをまとめた『余市・小樽における竹鶴政孝とリタ』（小樽商科大学、2015年）は、電子書籍ポータルサイト「hokkaido ebooks」で閲覧できます。<http://www.hokkaido-ebooks.jp>